



市史通信

第17号

仙台市博物館
市史編さん室



狩猟図(仙台市博物館蔵) 伊達吉村筆と伝えられており、イノシシなどの狩のようすが描かれている

せんだい **今昔**

イノシシと温暖化

ここ数年、イノシシによる農作物への被害が仙台近辺でも発生しています。そうした報道に必ずといって良いほど「イノシシは以前は宮城県内にはいなかったが、温暖化の影響で生息地を北に拡大している」というコメントが付いてきます。しかし、イノシシの生息地拡大は、本当に温暖化と関係しているのでしょうか？

イノシシが寒いところに生息できないというのは、「イノシシは土中の小動物や植物を食料としているので、積雪30cm以上の状態が長く続く地域には生息できない」という研究が根拠となっているようです。しかし、仙台近辺でそうした状況が長期間にわたる地域というのは、県境に近いかなり山深い場所に限定され、人里に近い場所は以前からイノシシの生息に不適當であったとは思えないのです。江戸時代の文献を見ても、仙台近辺に多数のイノシシが生息していたことは明らかです。例えば享保20年(1735)1月25日に5代藩主伊達吉村が葛岡、権現森で行った狩では、シカ220頭と共にイノシシ42頭を捕らえています。また、7代藩主重村は、在国中は年に数回、権現森、鶴ヶ谷、金

剛沢、鉤取などの城下近郊の山々で狩を行い、シカやイノシシを一度に数十頭捕らえていました。

江戸時代にイノシシが生息していたのは、仙台近辺に限ったことではありません。仙台藩領というまでもなく、今の青森県にも多数のイノシシが生息していたのです。例えば、寛延2年(1749)は東北地方一帯で冷害となりましたが、八戸藩では冷害に加えてイノシシによる農作物の被害が非常に大きく、この時のことを「猪飢饉」と称していたほどです。

この時期の八戸地方におけるイノシシの増加は、大豆生産を目的とした焼き畑の拡大と関連するという研究があります。逆に仙台も含めて、明治以降、東北地方ではイノシシの姿はぱったりと見えなくなりますが、その理由は明確になっていません。少なくとも明治以降に東北地方で急激に寒冷化が進んだ、という事実はないのですから、温暖化のせいというよりもおそらくは人間の活動が何らかの影響を及ぼしたのではないのでしょうか。

温暖化が進行しているのは確かですが、こうした動物たちの生息域の消長は、人々の生活様式の変化に大きく左右されているように思われます。亥年の今年、イノシシが消えた謎をどなたか調べてみませんか？

酒々いろいろ

古来より日々の暮らしを楽しませ、人びとに潤いを与えてきたお酒。
 ここ仙台でもさまざまなお酒がつくられ飲まれてきました。
 お酒を飲んだら飲んだ分だけ、エピソードがあります。
 今宵はどんな一杯をいただきますか。

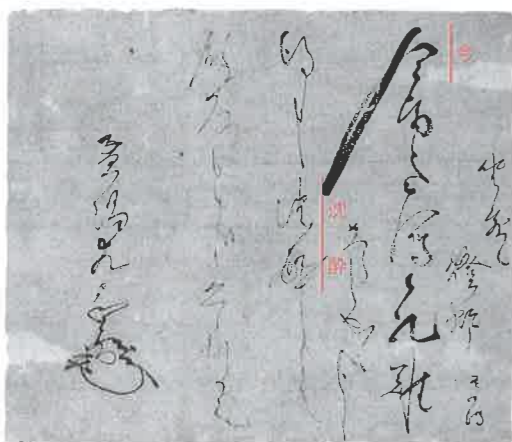
酒好きな政宗

伊達政宗は無類の酒好きだったようです。城下の造り酒屋の元祖は、政宗が大和国(奈良県)の酒屋を招いたことから始まります。かねてから親交のあった剣豪柳生宗矩のあっせんで、慶長13年(1608)大和国榎森より雲野又五郎を招き「御用酒造り」を命じました。又五郎は榎森氏を称し、清水門付近・巽門の南側の地に敷地と酒蔵を与えられ、藩用の酒の製造にあたりました。



仙名城復元模型酒屋部分(仙台市博物館蔵)

また政宗は酒が過ぎて我を忘れ家来の頭を脇差の鞘で殴ってしまう、ということもあり、酔いが覚めてから反省し素直に家来に謝ったという話もあるほどです。さらに酔って手紙を書くこともしばしばで、下図で示した手紙にも、書き出し部分「今」の一目の伸び具合や、「沈酔」という言葉にそのことが推測されます。ほかにも慶長15年(1610)に白石から仙台へ酒を運ばせるための伝馬黒印状を発令し、これを使って何度も配送させたようです。



某宛伊達政宗書状(個人蔵)

城下の酒蔵事情

仙台領は国内有数の米どころであり水資源が豊富なこともあって、古くから酒造りの歴史があります。領内は酒豪が多いことでも有名で、その評判は遠く江戸まで届いていたことが領内の名所名物をまとめた「仙台領高名競」に記されています。

仙名城下で酒造を行うには、藩の許可を得て酒株を取得し役金を納めることが定められていました。こうした厳しい規制のなか、清酒屋が仲間を結成して酒を製造し、許可を受けた酒屋が販売していました。なかには水で薄め過ぎた「薄酒」を売る悪徳酒屋もあり、ときおり藩の役人によって抜きうち検査が行われ、酒の品質や価格が調査されたようです。また、濁酒は清酒にくらべ比較的規制が緩いこともあり、家臣が自家消費のために造る分については認められていました。しかし天明7年(1787)に大番士の片寄左太夫が濁酒を売り払ったことにより閉門処分を受けるなど、家臣のなかに清酒や濁酒を製造・販売する不屈き者もいたという実態がうかがえます。



明治以降、酒は一般に普及し、それに伴い戦前まで多くの蔵元がありました。大正末期から昭和初年にかけて仙台の蔵元は14軒ありましたが、戦時中は米確保のため酒造量を減らされるなど規制が強まるなか、戦火の余波を受けて焼失し廃業を余儀なくされた蔵元もありました。現在、仙台での蔵元数は3軒を数えるのみとなっています。「千松島」で有名な国分町菅原家は、万治3年(1660)創業の最も歴史のある造り酒屋でしたが、昭和50年代から酒造を取りやめてその銘柄名のみを残しています。

携帯用の酒が存在した?

明和6年(1769)7代藩主重村は「印籠に詰めて飲めるような、携帯できる酒はないのか」と家老に尋ねました。家老はこの一件を、すでに和製ぶどう酒など数十種類の酒を造っていた当時の榎森当主に伝えたと、代々伝わる秘伝の製法によって「水で戻すと酒になる」「夏水の酒(印籠酒)」を造り上げました。形状は丸薬のようなもののなか粉末なのか定かではありませんが、3回ほど試みて作ったのち藩主に献上したところ大変喜ばれ、その後幕府にも献上されたようです。この秘伝の酒は現在はその姿を想像するのみです。

どぶろく爆発

まだ秋保電鉄が現役だったころのお話です。自宅で作ったどぶろくを一升瓶に入れて秋保電車に乗り、友人に持って行く途中のこと。電車の中でガタガタンガタガタンと揺れているうちにどぶろくが発酵してきて、長町駅近くになってボンと吹き出してしまい一升瓶の半分より以上なくなってしまったそうです。あたりの乗客はそのおおいびっくりしたとか。これは瓶の中で圧縮空気ができてしまうからで、それを防ぐには口栓に薬を折って詰めておくといふそうです。

麦酒事始



松倉麦酒のラベル(個人蔵)

仙台で初めてビールの醸造業を始めたのは仙台区長松倉恂の息子である松倉卯平です。「麦酒醸造方出納簿」(松倉家文書)には、明治13年(1880)8月、松倉恂・増田繁幸・本間季明が協力してビール製造業を起こすことを約束したと書かれています。同年11月27日、松倉卯平は名取郡長宛てに「麦酒醸造免許鑑札願」(松倉家文書)を出し、同月30日に許可が下りました。開業時、彼らは開拓使の片倉広を杜氏として雇用していますが、明治9年(1876)に開業した官立の開拓使麦酒醸造所(サッポロビールの前身)の技師だったのでしょう。翌年から販売された「宮城麦酒」の値段は1瓶(4合入り)25銭。当時の有力者達によって製造されたビールはまだ高級品でしたが、仙台でも徐々に浸透していきました。

大正時代には東洋醸造株式会社(仙台市小田原長丁通)によって「フジビール」が作られ、大正10年~12年(1921~1923)の2年間にわたり製造販売されました。経営不振であった東洋醸造が麒麟麦酒株式会社に合併されたのは大正12年8月20日のことでした。折りしも同年9月の関東大震災で同社の横浜工場が壊滅状態となり、仙台工場は大増産体制となったのです。



フジビールの看板(仙台市歴史民俗資料館蔵)

仙台市富沢遺跡保存館

施設探訪

地底の森ミュージアム

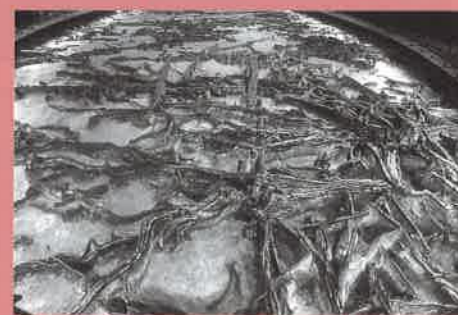
昭和63年(1988)に行われた富沢遺跡の調査で、約2万年前の氷河期の湿地林跡と、その場所で旧石器時代の人々が野営をした跡が発見されました。この世界的にも貴重な遺跡を現地で保存・展示するために、平成8年(1996)に開館した施設が仙台市富沢遺跡保存館(地底の森ミュージアム)です。



地底の森ミュージアム外観

地下に降りて入口から入ると、発掘されたままの状態での保存された湿地林跡をぐるりと一周しながら見学することができます。また、発掘された出土品より判明した「富沢の環境」とそこで活動した「旧石器人の営み」をテーマに、地下展示室ではスライド・復元映画の上映が、1階展示室では調査方法や分析の過程等を含めた展示が行われ、「謎解き」を楽しみながら学習できる場所になっています。これら常設展の他に年に4回の企画展や文化財に関わる各種講座が開催されています。

さらに、館の周囲には野外展示として2万年前の植生を再現した「氷河期の森」が広がり、学びの場とともに、憩いの場を提供しています。



湿地林跡(写真提供:地底の森ミュージアム)

平成19年冬の企画展のご案内

「氷河期の森 一社の都の原風景」

期 間 平成19年1月26日(金)~3月18日(日)

地底の森ミュージアム 財団法人仙台市民文化事業団 仙台市富沢遺跡保存館
〒982-0012 仙台市太白区長町南四丁目3-1
TEL:022-246-9153 FAX:022-246-9158

休 館 日 月曜日(休日のときはその翌日)、
休日の翌日(休日または土・日曜日にあたる日を除く)、
毎月第4木曜日(休日・12月を除く)、年末年始(12月28日~1月4日)
開館時間 午前9時~午後4時45分(入館は午後4時15分まで)

入館料	区 分	額	人 団 体
一 般	400	320	*左記の金額で常設展・企画展も観覧できます *団体は30人以上、引率者は30人以上につき1人無料
高 校 生	200	160	
小 中 学 生	100	80	

交通案内 仙台市営地下鉄長町南駅より徒歩約5分
JR東北本線長町駅より徒歩約20分
東北自動車道 仙台南インターより約7km



資料みつけた

『仙台市史』のように歴史を扱ううえで、重要な材料となる資料。資料がなければ、時代をさかのぼる作業は困難になるでしょう。ここでは先人たちが残してくれた資料のひとつをご覧ください。

『生出尋常高等小学校沿革誌』

学校にはいろいろな資料があります。なかでも学校沿革誌と学校日誌は、学校の営みやできごとおよび学級編制や人事などが分かります。たとえば仙台空襲の記述では当時の緊迫感が伝わってきます。

仙台市立生出小学校（太白区茂庭）の『生出尋常高等小学校沿革誌』は明治6年（1873）の創立以来の毎年の概要が記載されていますが、特筆されるのは戦前のものに当時の教育関係者等も記述されていることです。すなわち、学校管理者としての村長や教育を運営していく学務委員や、さらに教育予算や学校財産も記されているのです。中には氏名だけでなく、就任・退職の記述もありました。生出村は初代村長の長尾四郎右衛門の努力が評価されて日本三大

模範村に選ばれ、教育に関しても茂庭の邑主の家系である茂庭秀福が長尾村長と連携し、40年間余にわたって生出小学校に奉職するなど村政者が一丸となって当たってきました。その表れが沿革誌への記載になったとも考えられます。

『資料編 8 近代現代 4 政治・行政・財政』では別冊資料として合併市町村の首長も載せました。生出村に関しては『名取郡誌』（大正14年発行）以降、昭和31年（1956）の合併までの村長名や在職年月日について分からないところもありました。現在残されている『宮城県公報』にも載せられていますが、残念なことですので、不明なところがあります。そのようななか、この資料の記事は不明部分を補うものとなりました。このように学校沿革誌は当時のようすを具体的に伝えてくれるものとして、貴重な歴史資料になっています。



『生出尋常高等小学校沿革誌』の表紙と昭和20年度の記事（部分）

仙台の歴史を完全収録 好評発売中

第23回配本 資料編 8 近代現代 4 政治・行政・財政

■別冊資料付
■A5判 555頁
■定価4,000円

宮城県内主要書店、仙台市博物館でお求めになれます。配送をご希望の方は、電話・FAXで(株)宮城県教科書供給所へお申し込みください。

発売元 (株)宮城県教科書供給所
〒983-0034
仙台市宮城野区扇町一丁目6-3
TEL:022-235-7181
FAX:022-235-7183

お問い合わせ先
仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862
仙台市青葉区川内26番地
(仙台城三の丸跡)
TEL:022-225-3074



続刊予定
◎通史編/近代1~2・現代1~2
◎資料編/伊達政宗文書4・仙台藩の文学芸能
◎特別編/慶長遣欧使節

- 【通史編 1】 原始
- 【通史編 2】 古代中世
- 【通史編 3】 近世1
- 【通史編 4】 近世2
- 【通史編 5】 近世3
- 【資料編 1】 古代中世
- 【資料編 2】 近世1 藩政
- 【資料編 3】 近世2 城下町
- 【資料編 4】 近世3 村落
- 【資料編 5】 近代現代1 交通建設
- 【資料編 6】 近代現代2 産業経済
- 【資料編 7】 近代現代3 社会生活
- 【資料編 10】 伊達政宗文書1 (完売)
- 【資料編 11】 伊達政宗文書2
- 【資料編 12】 伊達政宗文書3
- 【特別編 1】 自然
- 【特別編 2】 考古資料
- 【特別編 3】 美術工芸
- 【特別編 4】 市民生活
- 【特別編 5】 板碑
- 【特別編 6】 民俗
- 【特別編 7】 城館

通史編 3,000円(本体2,858円)
資料編 4,000円(本体3,810円)
特別編 6,000円(本体5,715円)
※板碑のみ 5,000円(本体4,762円)
1冊ずつお求めになれます
【通史編 1】 原始は改訂版とセット販売となります

「市史せんだい」Vol.16のお知らせ

昨年度の市史編さん事業を報告するとともに、研究成果をいち早く紹介する機関誌「市史せんだい」の最新号が発売となりました。

今回の特集は「仙台・戦中戦後の子どもたち」で、生活のなかの遊びと学びを中心とした座談会のほか、旭紡織株式会社の設立に関する論文や新発見のアメリカ軍撮影の古写真なども掲載しています。

「市史せんだい」は仙台市博物館でお求めください。

A4判・120頁……………価格700円(税込)



博物館臨時休館のお知らせ

館内設備工事のため、下記期間中は臨時休館となります。ご迷惑をおかけいたしますが、何とぞご了承くださいませようお願いいたします。

平成18年12月25日(月)～平成19年1月31日(水)

お詫びと訂正について

せんだい市史通信第16号(平成18年7月31日発行)「日本最初の交流電気機関車」記事内にて誤りがありましたのでお詫びして訂正させていただきます。

“…仙台市営地下鉄も交流方式になって…”となっていますが、正しくは“…仙台市営地下鉄も直流方式になって…”となります。

『通史編1 原始 旧石器時代』(改訂版)の刊行について

旧石器遺跡発掘ねつ造事件をうけて改訂版を刊行しました。ご購入いただいた元版を博物館の「市史改訂版」係まで送料着払いでお送りいただくか、博物館まで直接お持ちください。お届けいただいた元版に改訂版を添えてお返しいたします。詳しくは市史編さん室までお尋ねください。

おねがい

市史編さん室では、仙台の歴史にかかわる資料を探しています。よりよい仙台市史を作るためにはより多くの資料が必要です。皆さまのお宅に古い文書や写真などございましたら、ぜひ編さん室までお知らせください。TEL:022-225-3074

せんだい市史通信 第17号

発行年月日/平成19年1月10日
編集・発行/仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地<仙台城三の丸跡>

TEL/022-225-3074
URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum

古紙/リレup配合率100%白色度85%再生紙を使用しています